

源氏物語と認知症

なにかと評判のよくない厚生労働省が、今年の「敬老の日」を前に調査した結果が新聞で報じられていました。それによると、全国の百歳以上の高齢者が9月末時点で過去最高の3万6276人に上り、うち女性は、3万1213人を突破しているとの事でした。

さらに、65歳以上の高齢者人口は、2819万人（平成20年9月15日現在推計）で、総人口に占める割合は22.1%、さらに悪名高き後期高齢者医療保険に移行させられる75歳以上は1321万人に達し、比率も10.1%と、実に日本人の10人に1人が後期高齢者となっています。

今年は、「源氏物語」が、「紫式部日記」の記述から寛弘5年（1008年）には宮中で読まれていたことが確認され、「源氏物語」が歴史上に登場してから ちょうど1000年の節目にあたり「源氏物語千年紀」と称して 様々な催しが行なわれています。 源氏物語当時の平安貴族の寿命は今とは違い きわめて短く、四十歳になると老人の仲間入りをしたとして十年ごとに賀宴を催して長寿を祝ったとされています。

源氏物語の主人公「光源氏」は52歳で亡くなったとされています。光源氏も40歳を超えた辺りから、「若い」を感じていたのかもしれませんが。柏木の巻で、正妻である「女三の宮」と「柏木」との密通（不倫関係）を知り、自らの老いを嘆く場面もでてきます。

又、「老いしらへる（痴る）」「年の数つもりほけたりける人（年老いてボケてしまった人）」という表現がみられます。 この「老いしらへる」は老いによって心の動きが完全に支配されてしまった状態をいい、辞書を紐解くと「年をとって正常な判断が鈍くなる。老いぼれる。もうろくする」（角川古語大辞典）「見るからに老いほうけて、僅かに昔の記憶があるような様子である」（岩波古語辞典）とあります。

しかしながら この時代 いわゆる認知症高齢者をマイナスイメージだけで捉えていたのではありません。 老人そのものが人びとの願望であった長寿を具現しているということだけでなく、老人が 世俗におけるいろいろな規制から開放された自由な身であり、経験の積み重ねによって得られた老いの「知」、その上に醸成された将来を見通す「知」といった、一般には神の属性思われるような畏敬すべきものを老人が持っているというプラスのイメージもありました。痴呆化する過程をこの世の規範から自由な神に近づきつつあるものとして受けとめ、温かく見守る姿勢があります。

老いて死んでいく者は、いずれは祖霊となって家や子孫を見守ることになると考えられていたため、未来の祖霊である老人の介護は将来の自分たちの幸せにつながるものと意識され、介護の動機づけにつながっているとされています。

瀬戸内寂聴さんは50過ぎから、源氏物語の現代語訳に取り組みされたと聞いています。 たとえ認知症になろうとも、敬愛され輝いている高齢者であろうと思います。